様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ６ 月　 １ 日現在

機関番号：１１３０１
研究種目：挑戦的萌芽研究
研究期間：2016～2018
課題番号：１６Ｋ１３１７２

研究課題名（和文）インド映画の“新しい波”「新中間層シネマ」の誕生―インド映画研究の確立を視野に―

研究課題名（英文）Disciplinary research on newly emerging middle class-oriented Indian cinema from a new perspective

研究代表者
山下　博司（Yamashita, Hiroshi）

東北大学・国際文化研究科・名誉教授

研究者番号：２０２３０４２７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,400,000円

研究成果の概要（和文）：作品上映による参加者からのフィードバックを活かしつつ研究会にける議論を積み重ねて研究を進めていくという趣旨の研究計画はほぼ達成され、相応の成果を見た。研究会の開催は期間中４回にわたり、のべ８人が発表と討議をおこなった。山下博司（研究代表者）も講演をおこなっている。成果は論文１編、事典（『インド文化事典』）項目１件、百科事典（『ブリタニカ』）項目１件、２名共著中の１章に結実している。以上のように、本研究計画を通じて、南アジア研究への貢献とその可能性の一端を証することができ、南アジア地域研究における「映画」の潜在性を学界に認知せしめ、かつディシプリンとしての確立の一助になり得たと考える。

研究成果の学術的意義や社会的意義
「文化現象としての映画」という認識を踏まえ、21世紀になって顕在化するインド娯楽映画の質的転換の背後にある社会事情を審らかにするとともに、映画世界に描出された新中間層を取り巻く世界を、言説分析と映像分析の双方向から分析し、成立しつつあるジャンルとしての「新中間層映画」の特質を多方面から解明する。方法論的には、作品内容に即したコンテンツ分析を重視し、新機軸に富むこれら作品群の意義や受容の傾向を質的方法を駆使して解明する。また庶民の目線からインド文化・インド社会を把握することは、インド研究にもう一つの視覚を提供することとなり、多角的・総合的なインド研究に一つの分野を切り拓くことにもなる。

研究成果の概要（英文）：Our initial research plan aimed at promoting research by accumulating discussions in the research meetings while making use of the feedback from the participants in screening session was achieved to a great extent, and the corresponding results were duly published. The study group was held in all four times during the period in Tohoku Universty, with a total of eight people giving presentations as discussants. Hiroshi Yamashita (representative of the research) also gave a special lecture. The results are published as one research paper, one article in a cultural encyclopedia ("Indian Cultural Encyclopedia") , one article in a general encyclopedia ("Britanica"), and one chapter of the book in which Yamashita is one of the two coauthors. As mentioned above, through this research project, I successfully proved the research potentiality of Indian mainstream cinema in South Asian studies, by giving due recognition to "films" as research materials to the academic community of Indian studies.

研究分野：南アジア地域研究

キーワード：インド映画　社会変動　中間層　新中間層　ミドルクラス　グローバル化　映画産業　南アジア

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９、ＣＫ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

現実世界の文化や社会の文脈からインド映画を捉え評価することは、これまでほとんど為されて来なかった。インド映画については、興行の先棒を担がされるようなアプローチが、とくに日本では主流になってきた嫌いがあり、事実上「研究」の対象とは見なされてこなかった。本研究では、映画にともなう従来の学界の悪弊を尻目に、「文化現象・社会現象としての映画」という基本認識に立って、文化研究・社会研究の営為の中に映画研究を位置づけようと試みる。具体的には、21 世紀になって顕在化するインド娯楽映画の質的転換・地殻変動の背景にあるインド社会の動きを、社会階層の視点も採り入れて審らかにするとともに、新たなジャンルとして生成過程にある映画世界に描出された新中間層を取り巻く世界を、言説分析と映像分析の双方向からアプローチし、成立し確立を見つつあるジャンルとしての「新中間層映画」の性格を多方面から解明する。

「映画」というツールを通じ、庶民目線からインド文化・インド社会の動態に接近し成果を公にすることは、南アジア地域研究に新たな分析視角を例示し提案することとなり、多角的・総合的なインド研究にもう一つの分野を切り拓き確立することにもなる。

２．研究の目的

本研究計画の目的は二点に集約される。一つは、インド・メインストリーム映画に登場し存在感を増しつつある新ジャンルとしての「新中間層シネマ」の特徴・特質を、代表的な諸作品の分析を通じて割り出し、新傾向映画の成立を 1991 年の経済開放政策採用以降のインド社会の構造変動と文化・社会変容という大きな流れ・文脈から跡づけ、インドのメディア史、娯楽映画史、および大衆文化史の中に適切に位置づけることである。それゆえ、本研究はインドにおける娯楽メディアと社会の聯関を探る試みとしての重要な一面を有する。

もう一つは、上記のような一連の作業を通じて、これまで興行や宣伝に煽られてステレオタイプ的・マンネリズム的イメージがはびこり、研究者から疎まれ、まともな研究分野とすらされてこなかった「インド映画」について、研究材料としての潜在的可能性を発掘し、「映画」をインド研究ないし南アジア地域研究の営為の中に正当な位置づけを図り、映画研究に市民権を与えることである。このように本研究は、インドの映像世界に出現した極めて新しい現象を文化・社会の視点から究明するともに、日本の南アジア研究で致命的に遅れていた「映画研究」の分野を確立する試みでもある。

３．研究の方法

方法論的には、作品内容に即したコンテンツ分析を重視し、新機軸に富むこれら作品群の意義や受容の傾向を質的方法（定性的研究方法）を採用・駆使して、作品論や作家論にも踏み込んで考察・解明する。研究計画は現地調査と研究会の 2 本立てとする。インド本土に加え、新旧のインド系ディアスポラ（移民社会）におけるインド映画の消費動向につきインタビューを中心とする現地調査をおこなう。さらに、インド映画産業の拠点を訪ね制作者等に面接取材をおこなう。他方、インドの娯楽メディアについて学問的に関心のある者を集めて研究会を組織し、「映画」というインド研究の新分野を開拓するための基礎を築く作業に徹する。研究会は仙台の東北大学を会場に開催して討議を重ねる。研究会を開催する折には時間的に先立つかたちで新ジャンル作品の上映会を開催し、参加者たちと討議し意見交換を重ねることで研究に活かす。結果的に 4 回の研究会を実施し、3 作品を上映し貴重なフィードバックを得た。

４．研究成果

研究代表者が所属する東北大学の学内外を問わずにインド娯楽映画に関心をもつメンバーを募り、他大学所属の研究者たちを含む研究会を、研究期間の後半を中心に計４回（2019 年 4 月の開催分を含めると計 5 回）にわたって開催し、延べ 8 人が研究発表と討議をおこなった。上映会も兼ねた研究会（2017 年 7 月 4 日開催）で山下博司（研究代表者）が来場者向けに講演をおこなったことも、成果公開の一端を形作っている。

また、インド・タミルナードゥ州のタミル語映画の制作拠点であるチェンナイ市コーダーンバーッカム地区において、往年の有名映画監督と長いインタビューをおこない、映画界の変遷についてつぶさに話を聞くことができた。

具体的な研究成果は、論文１編（ウェブ・ジャーナル）、事典（『インド文化事典』）項目１件、百科事典（『ブリタニカ』）項目１件、２名共著中の１章に結実している。いずれも専門的な内容を有しつつも一般市民も購入ないし検索・アクセス可能なもので、研究成果のより広い公開・浸透に貢献している。以上のように、本研究計画を通じて、南アジア研究への貢献とその可能性の一端を証することができ、南アジア地域研究における「映画」ののもつ研究領域としての潜在性を学界に認知せしめ、かつディシプリンとしての確立の一助になり得たと考える。また、本研究計画は山下博司が単独でスタートしたものではあっても、問題意識と方法論に賛同者を得ることができ、充実した研究会活動へと発展していった。こうして今後の実質的な共同研究に端緒を切り拓くことができたことも大きな収穫であった。

成果中の 2 編について以下に解説する。

新中間層出現の背景にある社会変化の具体例について、諸論文を参考に消費行動の特徴にま

で踏み込んで浮かび上がらせた。同時に、インド映画の海外市場動向の鍵を握る在外インド社会の経年的な変化と彼らのイメージの変容を検証した。厚みを増した中間層（とくに新中間層の出現）と在外インド人のイメージの好転が、近年のインド娯楽映画のコンテンツの変容に大きく関わっていることを諸資料を援用して示した。以上を踏まえ、作品分析と対照して、映画コンテンツの変容に与えるインドの社会変化の実態を明らかにした。その際、同じ制作会社、同じ脚本家が 2002 年と 2016 年に制作した、姉妹編とも言えるヒンディー語 2 作品を比較し、コンテンツ内の諸要素につき変化のありさまを具体的に検証した。宗教をテーマとした娯楽作品における宗教の扱いの変化についても、社会変化の文脈から説明され得ることを示した。以上の成果は、下記の日印協会誌の論攷「インド映画が映し出す現代インドの社会と宗教―最近のトレンドを中心に―」に一部反映されている。

岡光信子との共著『新版 インドを知る事典』（2017 年刊）は『インドを知る事典』（2007 年刊）を改稿した新著であるが、旧版の第Ⅶ章内の「インド人と娯楽映画」（23 頁分）の節を、新版では独立した第Ⅸ章「インド映画の歩みと現状」（30 頁分）に拡充し、本研究に由来する新知見と研究成果とを大幅に注ぎ込んでいる。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 1 件）

① 山下博司「インド映画が映し出す現代インドの社会と宗教―最近のトレンドを中心に―」、『現代インド・フォーラム』（公益財団法人・日印協会）2017 年春季号、3～14 頁

〔学会発表〕（計 0 件）

〔図書〕（計 3 件）

① 山下博司・岡光信子『新版 インドを知る事典』（東京堂出版、2017 年、全iv＋443 頁）、第Ⅸ章「インド映画の歩みと現状」（308～337 頁）
② 山下博司「DMK 映画」、インド文化事典編集委員会『インド文化事典』（丸善出版、2018 年、全 770 頁）
③ 山下博司『ブリタニカ国際年鑑 2019』（ブリタニカ・ジャパン、2019 年、全 706 頁）、宗教「ヒンドゥー教」（191～192 頁）

〔産業財産権〕

○出願状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

○取得状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

６．研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名：

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：
研究者番号（8 桁）：

(2)研究協力者
研究協力者氏名：
ローマ字氏名：

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。